

蔚山で倭軍の捕虜になった朝鮮人女性陶工

——「李良子」とは誰か？——

魯 成 煥

1. はじめに
2. 蔚山で倭軍の捕虜になった二人の人物
3. 津和野で活躍した陶工「李郎子」
4. 日本の侍となった「武林降」
5. おわりに

1. はじめに

2010年10月、韓国のある日刊紙が日本研究者にとって驚くべき記事を発表した。それは、「日本で最も大きい陶芸村を形成している山口県萩焼の元祖」は「蔚山から連れ去られた陶工の李良子氏が初めて作った焼物」であるという新説であり、その新説が提起されて以来人びとの関心を集めているとの内容であった。その後、同様の記事が蔚山地域のほとんどの新聞社や放送社によって、連日まるで競争するかのように大々的に報道された。

この新説の提唱者は、日本歴史研究家の金文吉キムムンギルによるものであった。その内容を要約すると、次のとおりである。

『吉賀記』という島根県南部のある領主の家門書によって、壬乱（文禄の役）の際、この地域の領主だった「齊藤市郎左衛門」が「李良子イヤンジャという朝鮮人を連行し、名前を右衛門に変え、朝夕に不思議な陶磁器を作らせ、李良子は寂しさを慰めながら朝鮮陶磁器を作っていた」ということが明らかになった。齊藤は蔚山からの帰り道で、女性陶工、縫い物や織り物をする女性15名を一緒に連れて来たが、そのうちの一人が李良子であり、彼女は当時蔚山の最高技術者として島根県石見地方で最初に陶器を作った人物として知られていたという。そして彼女が伝えた器と陶磁器の技術は、子孫達によって江戸中期に山口県萩に渡り、今や世界的に知られている萩焼に発展し、また別の子孫達は京都滋賀県の信楽焼に発展させ、世界的な陶芸村として脚光を浴びてい

る、というものである¹。

もし仮にこれが事実だとすると、それこそ画期的な事件であるといっても過言ではない。蔚山出身の陶工で、日本で活躍した人物がいたことだけでも驚くべき発見だが、その名前が「李良子」であるということも今まで全く知られていない新事実であり、従来の解釈とは大きく異なるものである。

これまで、信楽焼の鼻祖については明らかになっておらず、また萩焼は朝鮮陶工の李勺光イジャクグァンと李敬イギョンによるものであり、さらに石見の陶器は18世紀の後半に備前出身の陶工が江津から技術を伝授したことに始まると解釈されてきた。しかし、今回の新説はそうした見解を全て否定するものである。それだけではない。日本に連れ去られた女性陶工自体きわめて珍しいことであり、蔚山出身の「李良子」は、有田の百婆仙、三川内の高麗姥に続き、三人目の女性陶工がいたという凱歌をあげることにもなるからである。言わば、この説は日本の陶芸史を新たに書き直すような画期的な内容である。こうした点を考慮するならば、萩焼の始祖である人物が朝鮮の女性陶工「李良子」であるという見解は、単に蔚山の話にとどまるものではなく、日本陶芸史全体に大きな波紋を巻き起こすような重大問題であるといえよう。

しかし、問題は現在この新説を支える論理的根拠が不足しているという点である。具体的に指摘するならば、「李良子」が蔚山出身の女性であること、そして彼女が当時最高の技術者であり、萩焼の鼻祖であることを証明できるような確かな歴史的資料が提示されていないのである。

実際、「李良子」はこれまで全く知られていない人物である。歴史学者の韓明基ハンミョンギはあるテレビ番組で、「李良子」が山口県に連行された陶工であると発言し、その実在を認めるような発言をした²。また、大阪産業大学の朴容寛パクヨングァンは、金文吉の主張とは異なり、「李良子」は李郎子イランジャであり、それは本名ではなく、朝鮮時代には独身男性のことを「郎子」ナンジヤと呼んでいたことに影響を受けた名称であると見なした³。すなわち、彼は、女性だと推定した金文吉の説とは異なり、「李良子」を男性と見なしてはいるが、二人とも李郎子が朝鮮人であることでは合致している。

筆者は蔚山に住む日本研究者であり、自然な成り行きとして「李良子」問題に大きな関心を抱いた。そして、「李良子」がはたして蔚山出身の陶工なのか、そしてその名前が李良子と李郎子のどちらが正しいのか、また「李良子」は日本でどのように暮らしていたのか等に関して調べることが必要だと考え、2013年7月に鳥根県吉賀町を訪ねた。現地調

1 2010年10月4日付NEWSIS、ハンナム日報などを参照。

2 JTBC 鄭寛容チョングァンヨンライブ（2014年2月25日）における鄭寛容と韓明基のインタビュー内容を参照。

3 朴容寛「石見焼のルーツを探る」、『リポート21 < 21世紀地球講座から >』鳥根県立大学、2004年、p.212。

査の結果、「李良子」一族が眠っている墓場と窯跡の存在を知り、そこを踏査するとともに、柿木村図書館の協力により、李良子に関する重要な手がかりを提供する『吉賀記』を手に入れることができた⁴。

この史料をもとに、関連補助資料を収集して整理・分析することで、「李良子」が実際にどのような人物であったのかを具体的に明らかにすることが本稿の目的である。

2. 蔚山で倭軍の捕虜になった二人の人物

金文吉が新説の重要な証拠としてあげている『吉賀記』の「吉賀^{よしか}」とは、現在島根県西部に位置する小さな集落の名称である。古代に八つの角と足を持った怪異な鹿が現れ、人々を苦しめたが、江熊太郎という英雄が退治したという伝説によって鹿足郡と呼ばれたが、時代の流れにより、別称の「吉賀」が広く使われるようになった。現在は六日市町と柿木村が吉賀町に合併され、今日に至っている。したがって、『吉賀記』とは吉賀地域の記録という意味であり、この地域の史跡や名勝地などを記録した地方史であるとともに、この地域唯一の歴史書でもある。

『吉賀記』については不明な点も多いが、1981年に復刻された『吉賀記』の解説によれば、著者は尾崎太左衛門（1740-1812）とされている。彼は1740年（元文5）、広石の獅子屋敷で生まれた。幼い頃から読書を好み、書道と数学にも優れ、地域住民からの信望が厚かった。そして弱冠23歳で有飯^{ありめし}の庄屋となった。以後、1792年（寛政4）には福川の庄屋に、1799年（寛政11）には田丸の庄屋になった。その後、1805年に引退するまで約43年間庄屋の職を務めた。『吉賀記』は彼が田丸で庄屋を務めていた頃書かれたものである。1812年に72歳で亡くなったが、『吉賀記』はそれから10年後の1821年（文政4）に渡辺源宝により補完・執筆されたようである⁵。渡辺源宝は渡辺龍左衛門とも呼ばれているが、六日市にある新宮神社の宮司で、末岡淡路信英の次男として生まれた。そして12歳で津和野藩士の渡辺喜右衛門の養子になり、16歳から藩士として吉賀の下領^{しもりょう}と横田、青原^{あおはら}などの代官を歴任した。『吉賀記』の補筆は彼が青原にいた頃行われたものである。現在、我々が知っている復刻版の『吉賀記』は、元七日市村の助役である砂原岩吉氏が筆写したものが1976年に現代語に翻訳され、それが六日市の文化財審議会により出版されたものである。そして1986年に製作された『柿木村誌』にその内容が収録された。以下は『柿木村誌』に収録された文章である。

4 踏査は2013年6月に実施した。その際に協力していただいた柿木村図書館の関係者、および山口県萩市に住む岡弘氏に感謝の意を表す。

5 『吉賀記<復刻版>』六日市町教育委員会、1981、「あとがき」より。

宝暦⁶三（1753）年の春、防州徳山町外に行脚の婦人通り掛り一宿しけるが、はからずしも風症の病にて、翌朝出ること能はず、宿主驚き官府へ訴へければ、医師をつけ給ひしにより、漸く三ヶ月を経て全快し、又行脚せんと旅の支度しける。主人問ひけるは、「女の身、殊に老人の諸国行脚など如何なる宿願ぞや」と、尋ねける。

彼女が恥づかしげなる顔色にて答へけるは、「かくのごとく介抱に預りし上は、何をか包まん。我が身は播州赤穂の先主浅野内匠頭（1667-1701）家中、武林唯七といふ者の娘なり。我が君去る元禄（1688-1703）年中、吉良上野介（1641-1703）へ述懐の事ありて、殿中にて打ちかかり給へども、上野介の運や強かりけん、薄手にて恨を達し給はず、然るに殿中を騒がせし罪により、君は無念の切腹を遂げ給ふ。領地没収の上家中残らず離散す。中にも家老大石内蔵助（1659-1703）、亡君の仇を報ぜんとする忠臣の者より誓約し、元禄十五（1692）年冬江戸において吉良の屋敷へ打ち入り、遂に存意を達成し、公裁を受けて切腹したる四十七士の内なり。母は内匠頭殿御逝去の後、悲しみの余り病死す。我が身彼方此方と身をやつし暮らせしが、父母とも今は亡くなり給ひし上は、尼法師ともなりて先君父母の菩提を弔らばやと思へども、流石心のきたなさに姿も替へず、よしや此のまま諸国の神社仏閣を順拝し、江戸へ下りて墓へ水を手向けんと思ひ立ち巡国するものなり。我が先祖は唐土武林降の嫡孫にて、文字を読み変へ苗字を武林たけばやしと名乗るなり。

聞き伝ふ物語り申すべし。以前慶長二（1597）年、秀吉公朝鮮御征伐の時、浅野左京大夫幸長、彼の地蔚山籠城みぎりの砌、明より朝鮮加勢の大軍を起し、兵部尚書刑珍といふ者大将にて押し寄せ、合戦に及び、日本勢数度勝つと雖も、明軍事ともせず入れ替はり遊撃し、武林降といへる者真先がけて戦ひしが、幸長の功臣亀田大隅伏兵をもつて、明兵数万を破り、中にも岡野弥右衛門、武林降と引き組んで何なく生捕りし故、蔚山の寄手も退く。加藤清正勇智をもつて追散し、諸軍帰朝の節、武林降は幸長の手へ捕へられ、岡野へ預けられしに、岡野より幸長に助命を乞ひしかば、公儀より朝鮮召質助命御免ありて、岡野方へ預かる。其の後幸長の弟宗女正殿五万石の分地となり、岡野は将監と改名して家老職となる。よつて武林降を宗女正殿憐み給ひ、お茶の間の女房を下され女婦となし、其の名も武林唯右衛門と名乗らしむ。其の子唯右衛門代、女房内匠頭殿へ乳母勤めたり。因つて我が父唯七と内匠頭とは乳兄弟で、一入君の思召し深く、近習として召仕れしに、君空しくなり給ひしより艱難言ふばかりな

6 『吉賀記<復刻版>』の本文では、「宝永三年」となっているが、この文章の末尾に「武林唯七女、老女に及諸国行脚、と載のせたり。宝永三年なれば、凡二十餘りの女なるべし。老人とはいかん。定めて宝暦三年にてやあらん。書損成かきそんじべし。宝暦と見る時は凡七十前後の年齢にも当らんか。」と記されており、「宝暦三年」の間違ひであろうと指摘されているために、『柿木村誌』第一巻では、初めから「宝暦三年」に修正されている。

く、時を待ち義士の内に入り本望を遂げたり。誠に人の行末水の流程、うたかたの哀れなる事はなきぞかし。

さて又右に云ふ慶長年中（1596-1614）明年より捕虜となりし武林降の一族の内、李郎子と云ふ者、同時に石州三本松の城主吉見元頼の手にて、齊藤市郎左衛門に生捕られ、是又帰朝の節一同に召質となり、三本松の片傍杉ヶ峠と云ふ所に在住し、助命の上朝暮の慰みに焼物などもあそび給ひ暮せし由、今は如何成り行き給ふらんなど、常々父上へ唯右衛門語り伝へける。此度三本松へ通り掛り、ふと思ひ出し、若しや子孫等はおはせずやと案内者を雇ひ、杉ヶ峠へ尋ね行きけるに、城下より一里ばかり九折つづらありの山坂を越へ深山へ入り、漸く唐人屋と云ふ所に至りしに、人の住家ども無し、猿の声水の音のみ物凄く、呆然として立ち居たり。折柄口髭月代など生え延びたる老人に出会ひ、昔此所に唐人住みたる跡を知り給はずや子孫等御座らずやと尋ねければ、彼の老人目を怒らし、をかしき事を尋ぬる人かな、昔吉見と云ふ殿のおはする時、人質の唐人を此所に置き給ふ故唐人屋と云ふ。後に又左衛門と名を呼び、朝暮の慰みに焼物などせしと聞き及ぶ。子孫も無く一代にして絶へしと云ふ。墓は無きや尋ねければ、此所にこそと連れ行きけるが、焼き物台など集め畔の如くなる墓、誰訪ふ人も無しと見えてもろもろの草木生じたり。見れば餘りに情なく水を結び手向けして、山中の事なれば彼の老人に立別れ、三本松に帰りしなり。

侂も世の盛衰是非も無し。唐土にて武林降の氏族日本へ虜とりことなり、辱めを受けしのみならず、一代にして跡無く果て給ふ、唯右衛門存生のうち口惜しくも有つらん。艱難苦勞思ひやること無し。」と、泪をせき上げ身もだえして泣き居たり。

主人も不慮の事を尋ね、彼の婦の物語り由緒聞き捨つべきに非ずとて、あらあら聞き書調べ毛利侯へ届けしかば、〔健なる〕附人二人並に銀子下され、江戸へ送り届け給ふとなり。されば木末に花咲き元の名あらはるる所。

この説徳山の商客、金屋金右衛門の物語、そのまま唐人屋の旧跡に附記す⁷。

以上の内容からみると、蔚山から連行されたのは武林降だけでなく、もう一人「李郎子」という人物がいたことになっている（「李良子」という名は見当たらない）。武林降は岡野弥右衛門に預けられ、李郎子は石州（現在の島根県西部地方）三本松の城主吉見元頼に預けられた。武林降は先頭に立って日本軍と戦い、また彼の子の武林唯七も播州赤穂

7 柿木村誌編纂委員会『柿木村誌』第一巻、1986年、pp.343-345。原文は、『吉賀記』下巻「下領組々譜」に収録された福川村「唐人屋」に関する記述であるが、冒頭部分が省略されており、ここに省略されている原文を掲載しておく。本来、「文禄慶長年間秀吉公朝鮮御征伐の時、齋藤市郎右衛門信賢召質したる李郎子と云唐人、和名又右衛門と改名し、朝暮の慰に異様の焼物を整住す。」という一文がある。なお、『吉賀記<復刻版>』には頁数が付されていないため、頁数を指定することができない。

の侍になっていることから、本来武士階級出身であったと思われる。一方、李郎子は日本で朝夕の慰みに焼物などをして暮らしていたということから、彼の職業はもともと陶工であったと考えられる。李郎子は、「武林降の一族の内」と記録されていることから、この二人は同族の同郷人であったと見られる。

しかし、彼らの名前は当時の朝鮮でよく見かけられるものではない。つまり、極めて珍しい名前である。武林降の「武氏」は韓国にはない苗字であり、李郎子の「郎子」も、^{イ ナンジャ} ^{ナンジャ} 両班階層の女性を示す言葉（娘子）と同音であるため、固有名詞として使うには望ましくない。しかし、郎子の「郎」は金文吉の説のとおり、李良子の「良」とは違う発音であり、その意味は女性というよりは若い男性を示す言葉である。では、この「武林降」と「李郎子」とは誰なのか。それについて具体的に探る必要がある。

3. 津和野で活躍した陶工「李郎子」

李郎子に関する『吉賀記』の文章の中に、「後に又左衛門と名を呼び、朝暮の慰みに焼物などせしと聞き及ぶ」というくだりがある。この記述は二つの点で重要な手がかりを与えてくれる。一つは、彼が日本式の名前である「又左衛門」に改名したということである。それは彼が男性なのか女性なのかを示唆する重要な記録であり、この名前は男性に付けるもので、決して女性のものではない。つまり、李郎子は女性陶工ではなく、男性陶工であったと考えるのが自然である。二つ目は、李郎子が定住したのは、金文吉が主張したような山口県ではなく、鳥根県であったということである。

3-1 「唐人焼」の由来

李郎子が暮らした吉賀町の人々が彼が作った陶器を「唐人焼」と称したことは、さきほどの引用からも確認することができる⁸。現地での調査によれば、地元では、相手が訳のわからぬことを言う時これを「とうじんを言う」という表現をよくする。この始まりは文禄・慶長の役以後、ここに連れ去られた捕虜たちが地元の人々に話し掛ける時、地元の人には全く理解ができなかったからだと思っている人が多い。つまり、最初は地元の人と外国人捕虜が互いに言葉で意思疎通することができなかったと考えられ、このような悪条件の中で、李郎子は日本人と話し合い、陶器を焼いていたと考えられる。

彼が陶器を作っていたと思われる窯跡に、現在吉賀町教育委員会が立てた案内表示がある。そこには、窯跡に関する次のような説明が書かれている。

8 2015年現在、津和野町と「唐人屋」を繋ぐトンネルが建設されているが、このトンネルの名は「唐人屋トンネル」と名付けられており、現在も地名として使われていることがわかる。

唐人焼窯跡は、西日本における初期の焼窯でガラス質の釉をかけた焼き物、すなわち陶器を焼いた窯としては県内で最も古いものの一つです。

別名「焼き物戦争」と呼ばれる豊臣秀吉による文禄（1592年）慶長（1597年）の役で、津和野城主の吉見広長に従軍して朝鮮に渡った福川三之瀬城主の齊藤市郎左衛門は、蔚山の戦いの後、帰国の際、陶工李郎子連れ帰りました。そして、李郎子をそのまま預かることにし、陶器に適した浅黄土があるここ杉が峠に住まわせて窯を築かせました。これが唐人焼の始まりです。

昭和57（1982）年度に行った発掘調査の結果、窯体は5室前後の各房を持ち、急な傾斜を持った面に築かれた比較的小規模な「階段状連房式登窯」であることが確認されました。また、焼き損じ品を捨てた「ものはら」からは、皿や碗のかけらが多く出土し、この地方の日用品を供給していたことがわかりました。ここより300m下った場所に李郎子の墓があります。

この説明文からわかるように、1981年に柿木村教育委員会は李郎子が作業していたと思われる窯跡の発掘調査を行い、その窯が非常に急峻な斜面に作られた小規模の登窯であり、また、彼が作ったと思われる陶器は主に日常生活に必要な雑器であることが確認された。しかし、発掘調査チームによれば、茶碗とすり鉢の一部の破片も発見されており、日常雑器だけでなく茶道具も作られていたこと、そして釉薬には白い藁を燃やした灰と黄緑色の土の灰を使用したものが圧倒的に多かったということである⁹。李郎子がここで登窯を作り、薪火の高温で作った陶器の製造法は、それ以前の日本にはなかった新しい技術であり、そこで生産された陶器もまた目新しいものであったのだろう。そのためか、『吉賀記』には「朝暮の慰に異様の焼物を整住す」¹⁰と表現されている。

3-2 「李郎子」の墓

『吉賀記』によれば、武林唯七の娘が李郎子の子孫を探し回ったが、子孫はおらず、畔のような粗末な墓だけが残り、また「一代にして跡無く果て給ふ、唯右衛門（＝武林降）存生のうち口惜しくも有つらん」という記述からもわかるように、彼は早くに跡が絶えたようである。

彼の墓と推定される墓地はそこから遠くない所にある。窯跡から大通りに沿って下って行き、左側の「李郎子の墓」という案内表示が指す山道を上ると、彼の墓が現れる。しかし、彼の墓だけではない。そこには何人かの墓が集まっている。その墓域には塀が作られているが、中央に壇が積まれ、その上に李郎子のものだと推定される墓石が立っている。

9 柿木村誌編纂委員会（1986）、前掲、p.338。

10 注5を参照のこと。

『吉賀記』には表示がなく、雑草が茂っていたと書かれていたが、現在は誰かの手によって整備され、墓石も新しく作られている。墓石の正面には「帰一久我禪定門靈位」という文字が刻まれ、左右の側面には小さい文字で「寛文二年（1661）六月八日」、「季郎子（享）」と書かれている。李郎子の「李」を「季」と錯誤しているようだが、この墓石が李郎子のものと考えられているようである。

しかし、この墓石をめぐるのは、柿木村教育委員会はかつて慎重な姿勢を取っていた。たとえば、李郎子の窯跡の発掘調査後作成した報告書には、この墓のことを「現時点（1982年）で李郎子の墓である証拠はどこにもない」と記し、また『津和野町史』一卷でこの部分を執筆した沖本常吉は、陶工ではなく、山で木を削り、器を作っていた木地師の墓場であろうと推定した。¹¹と記されている。つまり、彼の墓地はあくまでも口伝であり、歴史的に実証されたものではないとの立場であった。それが、今では案内表示に「ここより300m下った場所に李郎子の墓があります」と説明するほど完全に態度を変えており、今や彼らも墓石に書かれた季郎子を「李郎子」と認めるまでになっている。

一方、李郎子の墓石が立っている壇の下には二つの墓石が並び立つが、右側の墓の正面に「空」という文字の下に「道達禪定門靈位」、そして側面には「寶永三年（1706）十二月二十九日」、その傍の墓石の正面には「歸眞貞円信女靈位」、側面には「寶永五年（1708）二月二十七日」と書いてある。『柿木村誌』によれば、李郎子がこの地域に定着し、日本人女性と結婚したが、子供がいなかったため、養子入りし、養子もまた陶工の道を歩んだ、と記されている¹²。したがって、上記の墓石の「道達」という名前は養子の名前であり、またもう一つの墓石の名前の「貞圓」は養子の妻であろう。李郎子は1661年、道達は1706年、貞圓は1708年にそれぞれ死亡したと推定される。

武林唯七の娘である老婆が李郎子の子孫に会うためにこの地域を訪ねた年代を、尾崎太左衛門が記録した際には「宝暦三年」ではなく「宝永三年」と記されていた¹³。後に補完して執筆した渡辺源宝は、これについて疑問を投げかけた。その理由は、武林が赤穂の浪人集団に加わり、主君の仇を討ち、切腹をした時の歳は32歳であり、1703年である。しかし、彼の娘が老婆になり李郎子を探し訪ねたという「宝永三年」は1706年であるので、辻褄が合わない。武林が若くして結婚し、25歳で子供が産まれたとしても、1706年にはその子は11歳である。『吉賀記』には彼女を「老人」と表現している。従って、これは「宝暦三年（1753）」を書き間違えたものと考えるのが自然であろう。とすれば、彼女の歳は大体58歳前後となり、老婆という表現とも一致するというのである。

この説が正しいと思われるのは、さきほどの墓石からも確認される。宝永三年（1706）

11 柿木村教育委員会（1982）『唐人焼窯跡発掘調査概報—島根縣鹿足郡柿木村—』、p.30。

12 柿木村誌編纂委員会（1986）、前掲、p.339。

13 注6を参照。

は李郎子の養子とその妻が生きていた時期である。したがって、探し回っても子孫が見当らなかったとの説とは符合しない。しかし、それが宝暦三年（1753）だとすれば、貞圓が亡くなってから45年後のことなので、李郎子の子孫を探した時、子孫もおらず、雑草が茂った粗末な墓だけがあったとの老婆の言葉と符合する。

李郎子が蔚山出身の陶工だという説を唱えた金文吉は、蔚山のある日刊紙のインタビューで「日本に連行された陶工たちが男性であるという偏見が多いが、実際、多くが女性であった事実に注目すべきだ」と述べ、「李郎子」は名もない下層民だった女性陶工に日本人が付けた名前である可能性が高いとの主張を曲げなかった¹⁴。彼が李良子を「李郎子」に修正し、その名が本名ではなく、女性陶工に付けた名前であろうと推定しているのは、序文で紹介した日刊紙の主張とは少々異なるが、李郎子を女性として見る点に関しては変わらぬ態度を取っている。

しかし、以上で確認したように、「李郎子」は李良子ではなく、そして女性ではなく男性であり、丁酉再乱（慶長の役）の際に倭軍に連れ去られた人物であったと考えられる。彼はもともと陶工であったため、その資質を活かして津和野付近の柿木村で登窯を作り、陶器を焼きながら暮らし、1661年ごろに亡くなった人物であると想定される。彼は現地の日本人女性と結婚したが、子どもがおらず、家を継がせるために養子を入れたが、その養子にも子どもがいなかったのか、早くに跡が絶えた。日本での李郎子の暮らしと家系は早々に終わってしまったようである。

4. 日本の侍となった「武林降」

では、金文吉の主張の通り、「李郎子」は蔚山出身の朝鮮人なのだろうか。これについても『吉賀記』は大事な手がかりを残している。それによると、李郎子は武林降の一族であり、武林降は唐土出身で、また李郎子のことを「唐人」と呼んでいる。したがって、彼を中国人とみなすのがごく自然であるが、当時日本では外国人のことをすべて「唐人」と表現し、外国を「唐土」と表すこともあった。そのため、唐土、唐人と言われただけで李郎子を中国人と考えることは早計である。実際、九州や四国地域でよく見られる「唐人町」は、中国人街ではなく、朝鮮人街を示す場合も多い。したがって、「唐人」とは朝鮮人にも適応できる「外国人」を意味する通称でもあったため、李郎子の出身地を考える上では慎重を期する必要がある。

4-1 武林降の本名

『吉賀記』に示された手がかりは、李郎子が武林唯七の先祖である武林降の一族である

14 『慶尚日報』2010年10月5日付。

との示唆である。しかも唯七は、「忠臣蔵」に登場する四十七士の一人であった。「忠臣蔵」とは浄瑠璃（文楽）や歌舞伎の舞台でよく取り上げられる「仮名手本忠臣蔵」の通称であるが、この芝居は江戸中期に起こった赤穂事件をテーマにしたものである。

『吉賀記』によれば、武林降の子孫である唯七の母親が赤穂藩主の浅野長矩の乳母であったために、彼らは互いを乳兄弟と呼び、彼らの間柄は格別であった。しかも唯七は吉良の首を斬った張本人である。彼に関する資料は色々なところで散見されるが、唯七の先祖にあたる武林降の出身地が明らかになれば、彼と同郷である李郎子の出身地も自然に分かるはずであり、注目する必要がある。

武林唯七の本名は武林隆重（1672-1703）である。彼は江戸前期の赤穂藩の武士であり、通称唯七と呼ばれた。彼の父親は渡辺式重で、母親は北川久兵衛の娘であった。式重の父親は渡辺士式（?-1657）である。彼は治庵と呼ばれた。可見弘明の研究によれば、治庵の11代孫の山田一彦氏が治庵を始祖とする『先祖由緒書』を所蔵しているが、そこには「元祖武林治庵士式」、「初名二寛」、「本国中華生国杭州武林郡」、「鄒国公孟軻六十一世之孫」と記されているらしい¹⁵。

これが正しいとすると、彼の始祖である武林治庵士式の本来の名は「二寛」であり、本国が中国杭州の武林郡出身で、鄒国公孟軻の6代孫にあたる、ということになる。とすれば、彼の本名は渡辺士式ではなく、「孟二寛」であり、また武林降とは彼の故郷の名に因んだ別称であったと考えられる。そして、彼は明の遊撃副官として朝鮮に派遣された人物でもあった¹⁶。

その彼がどういう経緯で日本に住み着いたのだろうか。このことについて、江戸時代に関心を持った者がいた。室鳩巢（1658-1734）¹⁷である。彼は唯七とはほぼ同時代を生きた朱子学者であった。彼が1703年に著した『赤穂義人録』（巻下）には、「武林隆重、唯七と号す。近侍祇候。隆重の先は、朝鮮の人なり。何姓なるかを知らず。その居る所の里を武林と曰ふ。文禄中、豊臣氏、朝鮮に事あり。隆重の先世、わが師の獲る所と為る。その子孫遂に日東の人と為り、始めて先祖の出づる所の地を以て氏と為すと云ふ。」¹⁸と綴られている。その翌年の1704年に著した著書の『鳩巢小説』（巻下）には、「朝鮮に援軍とし

15 可見弘明「研究ノート 孟二寛とその後裔〈補遺〉」、『史学（75巻-2、3号）』慶應義塾大学、2007、p.144。

16 可見弘明「孟二寛研究の現状と問題点」、『中央義士会会報』中央義士会、2007、p.3。

17 江戸出身の朱子学者。15歳の時、加賀藩の家臣となった。その後、江戸時代を代表する学者の木下順庵の下で修学し、以後同門の新井白石の推薦で幕府の儒官となり、合理的な人材登用のための制度を作るなど、将軍吉宗の改革政治を補佐し、続いて家重の侍講になるなど権力の側近であった。赤穂事件を見て書いた彼の著書『義人録』は主君と臣下の忠と義理を強調する立場で書かれたので、当然47名の侍達はこれを象徴する人物として称えられた。

18 石井紫郎校注「赤穂義人録 巻下」、『近世武家思想』岩波書店、1977、p.330。

て派遣された明の杭州武林出身の孟二寛であり、彼の郷里の名に因んで、日本では武林治庵と称し、医術により生計を立てた。」と訂正されている¹⁹。

これらの記述からわかるように、おそらく室鳩巢は当初、孟二寛についてよく知らなかったようである。単に秀吉の朝鮮出兵の際に朝鮮から捕虜になった者ということだけで、当事者を朝鮮人と断定し、また唯七の家系も把握しきれず、苗字も名前も知らないと綴っていた。しかし、その翌年には彼に関する比較的詳細な情報を入手したようで、唯七を中国人の孟二寛の子孫であると訂正している。

以後、これがほぼ通説となった。たとえば、岡田清が「巖島図会」で書いた文書でも「士式は孟子の子孫で、漢土の武林郡の人である。明末期に我が日本に帰化し、武林治庵と名乗られた。」と述べ²⁰、また赤穂の四十七士に関する専門の辞書でも、「秀吉の征明以後、明の人である孟二寛が帰化し、日本人と結婚し、その子は完全に日本人になった。子孫の中に渡部平右衛門というものがいたが、彼が初めて赤穂藩主になったとみられ、武林唯七は彼の息子である」²¹と記述されている。

以上から分かるように、唯七の祖父である孟二寛は中国杭州武林郡の出身で、壬乱の際に朝鮮を支援するために派遣された明の兵士であり、彼は朝鮮における戦争中に倭軍に捕まって日本に定住し、時には武林または渡辺士式と名乗り、通称で治庵と呼ばれた者であったと考えられる。

4-2 武林降（孟二寛）の渡日をめぐる二つの説

『吉賀記』によれば、彼が李郎子とともに蔚山で捕虜になったことになっている。しかし、孟二寛の渡日に対しては、これまでいくつかの見解があり、それを総合すると概ね次の二つに整理される。一つは日本漂流説であり、もう一つは戦争捕虜説である。

前者は、彼の墓石と『先祖由緒書』に書かれた内容にもとづいたものである。彼の墓石は広島島の南湘院という寺院にあるが、その墓石の正面に「治庵玄道大徳」「覚翁信篤居士」、側面には「治庵の名は士成（士式の誤記？）であり、明の杭州武林出身で、長門に漂流し、孟二寛と名乗った。（治庵名士成明杭州武林郡人漂流仕長門国称孟二官）」と刻まれている。『先祖由緒書』にも、寛永年間（1624-1643）に長門に漂流し、一時長門藩に住み着きながら1643年（寛永20）に青木重兼の斡旋で広島藩の侍になった²²、と記述されている。ただ、この内容を鵜呑みにすることはできない。なぜなら、彼が初めて日本に漂流したのは長門であると主張されているが、中国南部の杭州から長門まで漂流することはほ

19 近藤瓶城編『続史籍集覧（6）』所収鳩巢小説、臨川書店、1985、および可児弘明「研究ノート 孟二寛とその後裔」、『史学（74巻-4号）』慶應義塾大学、2006、p.101から再引用。

20 前掲可児弘明（2007）、p.150から再引用。

21 『増訂赤穂義士事典』（新人物往來社、1983年）p.249、可児弘明、前掲 pp.97-98から再引用。

22 前掲、可児弘明（2007）、p.145。

ば不可能に近い。従って、この説は彼が戦争捕虜であったという不名誉な歴史的事実を隠蔽する意図から生まれたものと考えられる。

4-3 どこで捕虜になったのか

後者の場合、さらに二つの見解に分けられる。一つは韓国の南原で捕虜になったとの説であり、もう一つは蔚山で捕虜になったとの説である。南原説は歴史学者の内藤寓輔によって提起された。彼は『譜録』や『萩藩閥閥録』などの萩藩の記録を根拠にして、孟二寛は1597年8月南原城の戦闘当時、全羅道兵馬節度使の息子である李聖賢^{イ・ソンヒョン}（当時7歳）の護衛武士だったが、城が陥落する危機に陥り、李聖賢ともう一人の付き人とともに城から脱出した。しかし、毛利の家臣である阿曾沼元秀（?-1597）が率いる部隊に捕まって長門に送致され、孟二寛が李聖賢の子孫である正玄^{ジョンヒョン}に漢方で伝わる枇杷葉湯の製造技術を伝授したという²³。

阿曾沼が南原城の戦闘に参戦したのは事実である。そして李聖賢は日本において李家^{リノウエ}という苗字の始祖であり、南原城戦闘で死亡した李福男^{イ・ボクナム}將軍の息子としても知られている人物である。従って、内藤の見解に根拠があるわけではないが、歴史学者の可児弘明によれば、彼が付き人二人とともに日本に送られたことが事実だとしても、内藤が証拠としてあげた『閥閥録』と『譜録』にはその付き人二人の名前が記入されておらず、また彼らについては二つの文献とも全て「息子または孫」の代で跡が絶えた（「子又孫ニ至断絶仕候」）と説明されているので、孟二寛が彼らの中の一人であるとは考えにくい、と指摘している²⁴。さらに、この説は朝鮮貴族の子息を護衛する武士が、なぜ朝鮮人ではなく、中国人であったのかについても、明快に説明できない。

一方、阿曾沼は南原城戦闘に参戦したが、蔚山城戦闘にも参戦し、そこで戦死した倭軍の将であった。この点を重視するならば、孟二寛が蔚山で捕虜になった可能性も出てくる。なぜなら、南原から退却しながら捕虜を抑留して蔚山まで移動させたと考えたよりも、蔚山で捕まえた捕虜を日本に退却する時一緒に連れて行ったという方が断然容易であり、可能性も高いと考えられるからである。実際、孟二寛は蔚山城戦闘で捕虜になったという説がある。この説は江戸末期にも広く知られていた。その代表的な例として、江戸末期を代表する画家の歌川国芳（1798-1861）の「誠忠義士傳竹林定七隆重」という浮世絵があるが、そこに「竹林隆重は赤尾の元家臣であるが、その先祖が朝鮮出兵の際、奥野正元により捕まった武林隆の子孫である」と書かれている。武林隆を竹林隆に、赤穂を赤尾に、岡野将監を奥野正元に、武林降を竹林隆に誤記しているが、慶長の役の際に浅野軍に仕えた岡野弥右衛門により捕まった中国人の武林降を示していると考えて間違いのない

23 内藤寓輔『文禄・慶長役における被擄人の研究』東京大学出版会、1976、pp.758-759。

24 前掲、可児弘明（2007）、p.147。

だろう²⁵。

この説は、武林降が兵部尚書の刑珍に従い、明の将帥として朝鮮へ出兵したが、蔚山戦闘の際、先頭に立って戦いながら岡野彌右衛門によって捕まり、日本に渡ることになったという『吉賀記』の内容とも合致する。しかも、『吉賀記』では彼も李郎子とともに蔚山から倭軍の捕虜になったと記述されている。

岡野彌右衛門の主君である浅野幸長（1576-1613）は、蔚山の西生浦^{ソセンポ}に2回も滞在した。最初は壬辰倭乱（文禄の役）であり、2回目は丁酉再乱（慶長の役）の時である。朝明連合軍と一戦を交えたのは慶長の役の時であり、この2回目の時浅野が率いる部隊は西生浦に寄って蔚山へ出陣し、明の武士である李如梅²⁶の部隊と戦った。孟二寛が岡野に捕まったのは、おそらくこの時であろう。彼が子孫に李郎子に哀悼の意を表したのは、同じ場所で捕まり、一緒に日本に渡って暮らしていながら会えなかった痛切な状況によるものだと察することができる。

4-4 まとめ

以上を整理してみると、李郎子は慶長の役の際に明の兵士として朝鮮に出兵し、蔚山戦闘で同郷出身の孟二寛とともに倭軍の捕虜になり、日本に渡った中国人の男性陶工であったと考えられる。すなわち、彼は蔚山出身でも、女性でもなかった。

孟二寛は最初は医術で生計を立てていたが、自分を捕まえた岡野の紹介により、浅野幸長の弟である浅野長晟（1586-1632）の家臣となった。またそれが縁となって浅野家の女房と結婚し、名前も武林唯右衛門に変え、居住地も広島に移したようである。宮本哲治の研究によれば、彼の妻は渡辺家の娘であり、彼が故郷の名に因んだ武林という苗字以外に、渡辺と名乗ったのは、そうした経緯からだという²⁷。

彼は日本で2度結婚し、前妻と後妻にそれぞれ息子が一人いた。長男が与市で、次男が平右衛門（式重）であった。次男の式重には息子が二人いたが、長男は渡辺尹隆と名乗って渡辺家の後継ぎとなり、次男の隆重は分家し、祖父が名乗っていた「武林」を自分の苗字にした。『吉賀記』の記述が正しいとすれば、李郎子の子孫を探して柿木村を訪ねてきた老婆は、隆重の娘だったと考えられる。

25 同前、p.146。

26 生没年未詳。明末期の将帥。李成梁の息子であり、李如松、李如柏の弟。壬乱の際には朝鮮に出兵された總兵李如松の下で参戦し、1593年には小西行長らが守る平壤城を奪い返したこともある。退却する日本軍を追いかけ、南下し、同年2月26日にあった碧蹄館の戦闘では日本軍に敗退し平壤城へ撤収した。1597年丁酉再乱の際には副総兵に昇進し、經理楊鎬・總兵麻貴の指揮の下、左協軍の隊長として明軍1万3006人及び李時言などの朝鮮軍を率いて、蔚山倭城を攻略したが、日本援軍の攻撃により結局勝てず、慶州に退却した戦歴がある。

27 宮本哲治『古文書による赤穂義臣伝』科学書院、1988、pp.188-189。

一説によれば、隆重の兄である尹隆も、1701年赤穂藩主の浅野が死亡した後に弟の隆重とともに大石の軍勢に加わり、主君の仇討ちを望んでいたらしい。しかし、親がともに病床に就いていることを考慮し、大石が彼に親の看病を勧め、1702年（元禄15）8月11日に仕方なく脱退したといわれている。このような事情をよく知っていたために、隆重の切腹後、自分の苗字を渡辺から弟の苗字である武林に変え、自分は武林勘助と名乗ったらしい。つまり、彼は弟の隆重の跡を継いだことになる。可児弘明によれば、隆重は後継ぎがないまま切腹したという²⁸。もしそうであれば、柿木村に住む李郎子の子孫を探しに来た老婆は、武林勘助の娘であった可能性もあり、真相は伝承の中に隠されたままである。

5. おわりに

以上で確認したように、蔚山から連れ去られた朝鮮の女性陶工の「李良子」という人物はいなかった。それは蔚山で倭軍の捕虜となった明の兵士である「李郎子」と取り違えた結果であった。李郎子は、女性でも、朝鮮人でもなく、浙江省杭州武林郡出身の中国人であったと思われる。李郎子は慶長の役の際、同郷人である孟二寛とともに朝鮮の援軍として出兵し、蔚山城で倭軍と戦い、倭軍の捕虜になった人物であった。李郎子は吉見元頼の部下に、孟二寛は浅野幸長の部下に捕まり、日本に渡って捕虜として生きた。

彼らは日本でそれぞれ違う道を歩んだ。李郎子は吉見の領地で本来の職業であった陶工の技術を活かし、登窯を作り、陶器を焼きながら暮らした。現地の女性と結婚し、又左衛門に改名した。しかし、子供がいなかったため、養子を入れたが、彼にも子がおらず、早くに跡が絶え、現在は彼が作業をしていた窯跡と彼の一族の墓が島根県吉賀町に寂しく残っているだけである。

一方、孟二寛は中国で習った医術で生計を立て、自分を捕虜にした岡野将監に助けられ、広島藩の医官となり、それがきっかけとなってその子孫も武士階級の人物になった。彼も日本人女性と結婚し、息子が二人産まれた。その息子二人のうち、吉良の首を斬ったのが武林隆重であった。そのおかげで彼の子孫は日本でも忠義を象徴する名門の家筋として今日に至るまで続いている。蔚山とともに倭軍の捕虜となって日本に渡った二人の人生は、極めて違うものとなった。

最近萩に住む小説家であり、陶芸家でもある吉岡暁蔵氏が、彼の個人ブログを通じて、李郎子の戒名の「久我」が17世紀に萩で活躍した三輪家の始祖である赤穴内蔵助あかなくらのすけの号と一致することに気がつき、李郎子は赤穴内蔵助であるという内容の小説を公開している。

蔚山で倭軍の捕虜となった李郎子については、未解明な点が多い。今後、これに関する研究が進む時、彼らに関する歴史がさらに明らかになるだろう。そのための継続的な作業

28 前掲、可児弘明（2007）、p.144。

が、本研究の前に置かれている課題である。

(日本語監修 井上厚史)

参考文献

- 石井紫郎校注(1977)「赤穂義人録(下)」、『近世武家思想』岩波書店
- 伊藤菊之輔(1967)『島根の陶窯』
- 柿木村誌編纂委員会(1986)『柿木村誌(1)』柿木村
- 柿木村教育委員会(1982)『唐人焼窯跡発掘調査概報—島根県鹿足郡柿木村—』柿木村
- 可児弘明(2006)「研究ノート 孟二寛とその後裔」『史学(74巻-4号)』慶應義塾大学
- 可児弘明(2007)「研究ノート 孟二寛とその後裔<補遺>」『史学(75巻-2、3号)』慶應義塾大学
- 可児弘明(2007)「孟二寛研究の現状と問題点」『中央義士会会報』中央義士会
- 内藤雋輔(1976)『文祿・慶長役における被擄人の研究』東京大学出版会
- 朴容寛(2004)「石見焼・唐人焼のルーツを探る」、『リポート21:「21世紀・地球講座」から』島根県立大学
- 宮本哲治(1988)『古文書による赤穂義臣伝』科学書院

キーワード 李郎子、蔚山、文祿・慶長の役、唐人焼、吉賀記、孟二寛

(NO Sung hwan)